

水の精神的な洗いについて

江 川 隆 進*

Study on “Washing” of Human Mind

Takayuki Egawa

There was an act of “washing” of the human mind from the ancient times and it is succeeded up to now. For example, the human mind becomes quiet by looking at the water and the relation between the water and the religion was very deep.

In this study, considering generally the meaning of “washing” and referring to former result of the ethnology, I surveyed “washing” of the human mind.

1. はじめに

人間が水を使うということは、水を飲む以外は洗うためのものであるといっても過言ではない。その飲んだ水でさえ、体内から便器に排出され、そして水で洗浄されている。

ところで、「洗う」とは、物をきれいにすることである。暮らしにおいて、洗うものとして、からだを洗い、食品・食器を洗い、衣類を洗い、浴室などの床を洗い、車を洗い、それに水洗便器では糞尿まで洗い流している。その洗うための水は、水そのまま使用する場合とお湯として使用する場合とがあるが、一般にはお湯を使う方が多い。

さらに、古来から人間の精神まで洗うという行為があり、現在に至っても継承されている部分がたくさんある。抽象的には、水が心を洗うのである。たとえば、水を眺めるだけでも心が安らぎ、さらに宗教と水とは縁が深く、洗うというよりも清めるという方がよいかもしれないが、死後の骨まで洗う習俗まである。

本研究は、最初に「洗う」ということを総括的に考察し、次に「洗心」について触れることにする。つまり、人間の精神的な意味による洗う行為について考察することにした。

2. 洗うとは

「洗う」を国語辞典で調べると、まずは水・湯・薬品でよごれを落とすことと記されている。つぎに、今までの職業をやめる意のほかには波が岸边になどに寄せたり返ったりすることや、よく調べる意もある。また「洗い」となれば、洗濯のことで、そのほかにさしみの一種のことを指す。

* 建設工学科 建築学専攻

したがって、ここで「洗う」とは、よごれを落とす意であることを確認しておく。何でよごれを落とすかとなれば、水（お湯も含む）が主体になるが、水だけではよごれは落ちにくいので、一般に洗浄効果を高めるための石けんや洗剤などを使用している。

化学的には、洗うとか洗浄することは物体（基質）の表面からよごれを取り除き、できるだけ元の状態に近づける行為や作業といえよう。そして、物体にもいろいろあるように、よごれにもいろいろあり、さらにその程度もさまざまなので、洗う程度もさまざまとなって、一概に洗うことを定義づけることはむずかしい。そのためには、よごれとはどういうものかを知らなければならない。

よごれを論ずるならば、人体と物体に分ける必要があるが、簡単にまとめたものが表－1⁽¹⁾⁽²⁾である。それらのよごれを取り除くために、いうまでもなく媒体として水が最も多く使われている。その補助的役割となっているのが石けんであり洗剤である。

物 体	よ ご れ
人 体	人体からの分泌と排泄によるもの 外的な生活環境によるもの
物 体	外観による（固体状よごれ、液体状よごれ、これらの混合よごれ） 新和性による（親水性よごれ、親油性よごれ、これらの混合よごれ） 性状による（有機質よごれ、無機質よごれ、これらの混合よごれ） 特殊なもの（カビ、細菌、放射能よごれなど）

表－1 よごれのいろいろ

洗う対象物は、ここでは暮らしに関連させる。その代表が人間のからだであり、からだを覆う衣類である。そのほかに、暮らしと密接に関連するものとして、住まいがある。住まいを洗うとなれば、おおげさだが、暮らしには衣食住はつきものゆえ、総称して述べた。具体的には、炊事があり、掃除も洗う一種で、さらに水洗便器の洗浄もそうである。そのような考え方が根底にあるのか、衣類や皿洗いのように人間まで洗ってしまうという装置まで開発されたことがある。頭を外に出してからだをカプセルの中に入れ、好みの温度と石けんを選ぶ。するとその後は、超音波によって作られた石けんの泡がからだを包み、洗い出すのである。あとはすすぎから乾燥まで自動的に行うようになっている⁽³⁾。人間が物として洗うとは、まさに「人間万事洗浄」⁽⁴⁾というべきことになる。しかしながら、洗ったあとの水はどうなるのであろうか。それはすべてきたない水となり、通常は下水道に放流している。洗いばなしではなく、洗ったあとのことを公害の視点から考えなければならないことは重々わかっている。どちらかと言えば、後者のことが重要視されているのが現状である。

ところで、漢和辞典⁽⁵⁾の「洗」のところには、洗うことのほかに恥やうらみを除くとかはらすの意もあり、洗心とある。つまり、心身の心も精神的に洗うことになる。この場合、精神的には水を使ってきれいにするのである。たとえば、禊（みぎ）の精神がまさに心を洗うことになる。

いずれにしても、「洗う」という行為を広範囲解釈するならば、暮らしが万事洗うことの連続であるといっても過言ではない。洗顔に始まり、炊事、糞尿を洗い流し、そのたびに手を洗い、

洗浴、口のすすぎなど、一日にどれほど洗っていることか、日常生活では気がつかないけれども洗いとおしているのではなかろうか。

なお、「洗浄」とは、国語辞典によると、汚れを洗い去ることとある。そして、「洗」は洗うことであり、「浄」はきよめることであるので、洗いきよめることにもなる。洗うことはきれいにする事ゆえ、「洗う」と「洗浄」ではそれほど違いがないが、洗浄の方がよりきれいにする意味にとられるかもしれない。

湯について考えて見ると、古代の湯はすべて洗浄という意味をもっていた⁽⁶⁾。当然ながら、湯は医療・美容・娯楽として意味があり、ローマ時代のカラカラ浴場は今日の日本の温泉リゾートなるものと酷似している。現在では、水で洗うよりも湯で洗う方が多くなってきているので、湯のあり方を追及しなければならないが、湯の元は水であるため、水の方を中心に述べるようになっていくことを断っておく。

このように考えてくると、「洗う」ことが人間だけのように思いがちになるが、家屋はもちろんのこと、産業においても洗浄は重要な役割を果たしている。たとえば、飛行機の表面をきれいに洗浄しなければ落下の原因にもなりかねない。さらに範囲を広げるならば、物ではなくて人間の心もあるが、この世の中の垢も洗う対象になる。たとえば、「人間万事洗浄」ならば、さらに飛躍すると、お手入れとかお化粧にも解せるので、たとえば、化粧に関する図書⁽⁷⁾には「洗う」と全く同じように扱っていた。人間の顔や髪の毛などの各部はもちろんのこと、洗濯や住まいの掃除に至るまで化粧の図書で扱っているのである。

そのようなことから、「人間万事洗浄」と同様に「人間万事化粧」とも言えるのではなかろうか。さらに、一般に化粧の前に洗うことが多いので、「人間万事洗浄後化粧」とすればよいのかもしれない。

3. 水の精神的な洗い

『釈氏要覧』の「洗浄」の項に、「洗浄に3種有り。一には身を洗う。二には語を洗う。三つには心を洗う。」とある⁽⁸⁾。その中の「心を洗う」ことが本研究の目的とするところで、精神的な意味で洗うことになる。したがって、水で直接洗うという行為よりも、水のもつ霊力などで洗うこととなる。つまり、からだをきれいにし、さらに心も安らぎのある気持ちにすることによって身も心も穢れを洗い去ることを意味している。

「心」とは、人の肉体を支配し精神活動の根本となる。したがって、精神とか意識とか考えなどの意味にもなる。他方、心、すなわち人間精神が人間の脳の所産であるという考え方もある。さらに、心は知・情・意で創られ、人間の脳から生じており、心は人間の脳の所産であり、人間の脳がなければ心は存在しないのである。しかし、心とは何かは現在のところまだ解明されていない⁽⁹⁾。

このように心を洗うとは、心の中の悪や穢れを洗い去ることになるので、水そのもので簡単に洗い去れるものではなく、精神的な手法の一部に水の精神的な部分が利用されるのである。その

手法などを、古来からの洗浄に対する意識から考察することにする。

3-1 禊の精神

古代の人は衣類やからだを洗うことはしていたが、果たして衛生的な面で洗っていたのであろうか。それよりもむしろ心を清めるために、それを宿すからだを洗い、やがてそれを包む衣服を洗うようになったと解されよう。すなわち、よごれや穢れを洗い清めるためのものだった。とはいっても、すべてが穢れを洗い清めるためのものではなく、おのずとからだをきれいにすることになるので、心身を洗っていたとすべきかもしれない。

とくに日本人には、洗いについて独自の価値観と文化をもっているといえる。たとえば、日々の終わりに風呂に入ってからだのよごれを落とし、大晦日に大掃除をしたり、病や死が身のまわりに起こると穢れを払うために禊をしたりするように生活の区切りに「洗い」という光景が見られる。現在は生活に変化が見られるようになって、すべて「洗い」と結びつけることはできないにしても、日本人にはその精神は今でも受け継がれている部分がある。

ところで、「洗濯」は衣類を洗うことの意味になるが、他方、衣類に限らず汚れや穢れをを洗い清めることも洗濯という⁽¹⁰⁾。したがって、洗濯することも禊をすることに結びつくことになる。つまり、日本人には「洗う」という行為が心身を洗うことを意味していたことになる。現在の衣類を洗う洗濯では、その意味は薄れてきていることは明白である。

しかるに、禊とは「水そそぎ」の略であり、また「身をそそぐ」の意だとの解釈がある⁽¹¹⁾。また、古代人にとって禊は、復活・誕生・還魂を意味し、その水は常世国（とこよのくに）から出て来るものであり、その湯に浴すると「人はすべて始めに戻る」と信じられていた⁽¹²⁾。さらに、水に物心両面にわたる穢れを洗い流す浄化作用があると信じられていたのは日本だけではなく、キリスト教の洗礼、仏教にも灌頂という頭から水をそそぐ儀式がある。そのほかに、インドのヒンズー教でも河川が豊穡（ほうじやく）・祓禊（ふつぎ）の源泉として神聖なものとされ、そしてイスラム教でも礼拝にのぞむにあたって清水でからだを清浄にすることが義務づけられている^{(13) (14)}

このように四大宗教においてさえ禊の精神がある。神は清らかなる存在であり、その神に近づくためにからだを洗い清めるのだが、もちろん水をそそいだけではよごれが落ちるものではない。これには物理的なよごれというよりも心理的効果をねらうものである。したがって、心清らかな気持ちで神の前にぬかずくことを目的とした精神的な浄化といえよう。

3-2 命の洗濯

温泉の広々としたお風呂に入ったときに、つい寿命が伸びたようだ、と言葉を発することがある。つまり、厭なことを忘れ、のんびりとした気持ちになったからである。このようなことが、命の洗濯といえるのかもしれない。

命とは、生きて行くおもとの力とすれば、その力を洗うことゆえ、苦勞など忘れ、気晴らしのために思う存分楽しむことのたとえとなる。つまり、寿命がのびるほど気ままに暮らすことの意となる。

また、一家団らんとなれば、「水いらずの命の洗濯」⁽¹⁵⁾となる。すなわち、命の洗濯は、衣

服の洗濯とちがって水がいない。命の洗濯をするという時のしゃれである。また、他人をまじえず水いらずというしゃれでもある。なお、「鬼の居ぬ間に洗濯」ということもあるが、命の洗濯の意で、主人や監督者などの恐ろしい人のいない間に息抜きにくつろぐことをいう。

命の洗濯にかかわることわざとして「相撲芝居は命の洗濯⁽¹⁶⁾」がある。くよくよせずにも何も忘れることを説いたものであるが、このような心境には凡人にはそう簡単にできるものではない。ここでいう洗濯とは、本来の意であるよごれた衣類などを洗ってきれいにすることから、衣類に変えて命を洗おうというのである。命とは、生きて行くおおもとの力であり、その力をきれいに洗うことが冒頭の意に解釈されている。

また、暮らしの風習として「せんたく帰り⁽¹⁷⁾」がある。嫁の里帰りのことである。ただし、嫁が生家に衣類をととのえに帰ることを「せんたく歩き」と呼ぶ地方があったり、針仕事のことも「せんたく」と呼ぶ地方もある。今でも正月やお盆になると生家にこどもを連れて帰ることがある。なかにはご主人も一緒の場合もある。生家に帰れば小姑になり、家事はいっさい行わずに長男のお嫁さんが主に家事を行っている。したがって、こんな気楽なことはない。要は、とくに忙しく働いている人には命の洗濯が行えるような社会になることを願わざるを得ない。

他方、「心の洗濯」というものがある⁽¹⁸⁾。のんびりするというよりも精神面の悩みを解くという意味に使われている。カウンセラーもその一種である。

3-3 洗魂・死を洗う

死の世界で魂を洗っているときのことである。すなわち、無事に浄土に行けるように水で洗う儀式である。とくに仏教では、死人に対して水の持つ霊力を付与する洗浄（洗滌）思想に基づいている。

3-3-1 産湯から始まる人生

「産湯から死に水まで」とか、「たらいからたらいまで」と、よく言われるが、人間は水に始まり水に終わるのである。そして、人それぞれには「背負い水」を持っているという⁽¹⁹⁾。それは人が生まれてくるときに、それぞれ一生の間に使う水を背負っているので、水を粗末にしたりすると、早く使いきってしまって水に困ったり、早死したりする意味で用いられたのである。

住まいにあっては、水のほとりで雨露をしのぐことから始まり、その水は飲む水であり、洗う水・浴びる水でもあった。もちろん、その当時には消毒するような装置はないので、自然水をそのまま利用していたことになる。ただ、使い捨ての水も利用する同じ川に流していたのであろうが、「三尺下れば水清し」の時代には川が汚染されることはなかった。それが人工的な採水の始まりである井戸を掘ることを知ってから、わが家独自の水を持つようになってきた。そこで、その井戸水は一家を支える重要な役割を果たすようになってきた。つまり、一族・家族がそれらの水を使って生活していることから、一族がそれらの水を介して団結心というものが生じてきたのである。したがって、一族・一家が生まれてから死ぬまで、一生、同じ釜の飯を食うように、水も一生同じ水を飲み続けることになる。そこで、一生の水は産湯につかり、一生の死は「死に水」で終わるが、そのあとに湯灌によってからだを洗い清められて死の世界に旅立つことになる。そ

のような意味から、産湯から湯灌まで、洗いに始まり洗いに終わるといっても過言ではない。

3-3-2 末期の水

古来から、年の始めに水を汲んで神仏へお供えする行事がある。この水を「若水」と言っており、水の「若」は「新」を意味している。年の始めの水は、邪気を払ってその年を健康で過ごせるようにとの願いが込められていた。つまり、水によって生命の再生を願っていたのである。この代表的な行事に奈良・東大寺のお水取りがある。

このように、水には邪気を払う力のほかに、人間の生命再生をもたらす力があると考えられてきた。現在の若水迎いの習俗は、一年の無病息災を願うようにやや変わってきているが、生命の再生を願う習俗は、「死に水」の習俗として現在でも続けられている。

「死に水」は、もともと日本古来の信仰によるもので、臨終の人の口に水を注いでやり、水の生命再生の力によって人を生き返らそうとした。その水は、当時のことから、その家の生命を支えている井戸水ということになるが、水を介して一族が固く結ばれるとも考えられ、また死の世界に行かずに、もう一度一族の中に戻ってきてほしいと願いもこめられていた。このような意味ならば、「死に水」でなくて「生き水」と言わなければならない。

ところで、食道ガンや喉頭結核で水が全く飲めずに苦しい思いをしている人の喉をちょっと湿してやるだけで苦しみが一瞬おさまるとある⁽²⁰⁾。現在は、点滴や胃に管を入れることで水分を補給しているが、昔は全くなすすべもなかった。そこで、渇きに苦しむ死期の近づいた人の口に少し水を含ませると、苦しみがやわらぎ、「どうもありがとう」と感激して亡くなっていった人もいたのである。そばにいた人たちは医学の知識がないために、まるで口に水を含ませること自体が魔法の術か特効薬のように思ったわけである。このようなことから、苦しんでいる病人が楽に往生できるという考えが広まり、いまも残る「死に水」の習慣になったとされている。

医学的にも「死に水」の存在価値があるが、その後死者に対する儀礼の意味合いが強くなったため、「死に水」になったと思われる。また、臨終の人の口に水を注ぐことを「死に水を取る」というが、現在では死んだ人の世話を最後まで面倒を見ることに転化している。なお、「死に水」のこと「末期の水」ともいう。

その儀式は、正式には、水をしきみ（モクレン科の常緑の小高木）の葉につけて、一滴死者の口に落とす儀式である。しかし、一般には割り箸の先に脱脂綿を糸で縛ったもので、血縁の濃い者から水で死者の唇をうるおし、死者がもう一度よみがえるという願いをこめて行うのである。故人にとっては、この世で最後に口にする水となり、人生最後の送別の「水杯」をかわすことになる。

ところが、臨終とか末期とは、もともと死の一步手前の状態のことなので、まだ死んでいないときに、「死に水を取る」のが本来の姿であった。それが死者との最後の別れという形式化された姿になったのである。いくら形式的になったからといっても、水のもつ再生力によって人を生き返らすことが根源にある。

したがって、この末期の水が魂を洗うこと、すなわち、死人に対して水の持つ霊力を付与する

洗浄（洗滌）思想に基づくもと考えられるものと判断できる。

3-3-4 湯 灌

死んだあとにも洗う行為があるのかとなれば、仏教の世界では水の持つ霊力の賦与で洗う精神は生きているのである。すなわち、仏教では沐浴が穢れなどを洗い流す行為があるが、死後も同様の意義があるのである。

臨終のあと、まずはお経をお坊さんにあげてもらい、納棺に先立って遺体を洗うことを湯灌という。洗うに当たり、以前は近親者が裸で、たらいの湯で洗った。その湯は逆さ水といって、水の中にお湯を注ぐやり方をする。また、湯灌の水をくむときも逆さ柄杓といって川下に向かって柄杓ですくうようにする。さらに、使ったお湯は縁の下などの日の当たらないところに捨てるのである⁽²¹⁾。このやり方は、一般的な方法で述べたが、地方によっては納棺の前に遺体をたらいに入れ、ぬるま湯で洗い清める風習もあったが、現在はほとんどすたれている。

現在では簡略化され、ぬれ手ぬぐいなどでちょっとからだを拭いたり、アルコールでぬぐうこともある。つまり、湯灌という儀礼から、どちらかと言えば、遺体を清潔にするためにからだを拭くことになってきた。さらに、遺体にお化粧をしたり、また新しい清潔なひとえの寝巻やゆかたに着せ替える。なかには、生前好んでいた着物に着せ替えることもある。

ところで、現在の葬儀が専門の葬儀屋さんをお願いすることが多くなり、次第に簡略化されている。そして、湯灌を専門に行う「湯灌サービス」の会社が全国各地に設立されている⁽²²⁾。死亡後、遺体を自宅で本来の湯灌をしたいという遺族の要望に応じるものである。なかには、特別仕様の車（湯灌車）で自宅に伺い、専用の浴槽を持ち込んで丁寧に遺体を洗い、死に装束や死に化粧まで施すようにしている。したがって、昔からある儀礼が完全にすたれたわけではない。

このように、死に至ってからの儀礼が親族で行われず、業者まかせのご時勢であろうとも、今なお湯灌や前項にある末期の水とがかたちばかりであっても残っている。どんな方法であれ、また簡略化されようとも、洗う精神が存在し、無事に浄土に到達できることを願わざるを得ない。

3-3-5 洗 骨

洗骨という儀礼は、死者の骨を堀り出し腐肉を洗い去ったのち骨壺などに収容して再葬することである^{(23) (24) (25)}。とくに沖縄列島に広く行われ、墓地に風葬するのが第一次葬、骨洗が第二次葬、これを済ますことによって葬儀は完了するとされていた。

日本本土では、仏教とともに火葬が中国から入り、天皇が火葬されるようになってから次第に火葬が広まったのである。ただし、地方にも火葬が普及してきたとはいえ、古来からの土葬はまだ残っていた。なお、洗骨の葬法は朝鮮・台湾・南中国などで広く行われていたが、日本では奄美諸島・沖縄列島に及ぶ南の島に顕著にみられた。日本本土では、とくに南部の沿岸地方に施行されたことがわかっている。このように、日本全体となれば、洗骨という葬法は少なく、南の島々でしか行われていなかったことになる。

骨を洗うとなれば、きれいな水で洗うのではなくて、沖縄では遺族縁者が集まって泡盛酒で洗浄する。そのときに、骨を太陽にさらさないために傘をさしたり、テントを張って日光を遮断す

る。水で洗うものと思っていたら、泡盛酒とは余程お酒が好きだったのかな、と思わざるを得ない。実際のことはわからない。また、死後に「灌頂」という儀式があって、納棺する前に死者のからだをきれいに洗うのである。同じ洗うにしても、骨になってから洗うのと死んだ直後の洗いとでは、どうみても後者の方が洗いがえがあるように思える。

なお、墓詣りの折、墓石に水をかけて洗うのも、洗骨と同じ精神である。もともと洗うという行為が信仰と深くかかわっていたことから、死者に水の霊力を与える行為となっている。いずれにしても、洗い清めることが死後になっても行われることに意義がある。

4. まとめ

古来から現代に至るまで、日常生活のための水、そして水の儀式など含めて、命の水とかわりながら一生を過ごすことになる。そして、その水が洗うためにほとんど使われてきているが、なかには水の霊力によって洗われることがあり、心を洗うためのものとなっている。

そこで、地球に有限な水を大切に、また有効に、さらに汚さずに利用する義務が各自にあることを自覚し、一生おいしい水を飲み続けたいとともに、水の霊力で心まで洗い、常に平穏な気持ちで生活が送れることを願ってやまない。

参考文献

- (1) 中西 茂子著 『洗剤と洗浄の科学』 14p コロナ社 1995
- (2) 大木建司・八木和久著『洗浄の基礎知識』 表1.1 産業図書 1993
- (3) 落合 茂著 『洗う風俗史』 251p 未来社 1984
- (4) 横山 鹿之亮著『洗うて浄めて』 9p 西田書店 1990
- (5) 諸橋 轍次著 『大漢和辞典』 ㈱大修館書店 1957
- (6) 日下 裕弘著 『日本の自然遊－湯浴の聖と俗－』 21p 近代文藝社 1995
- (7) ポーラ文化研究所編 『日本の化粧－道具と心模様』 ポーラ文化研究所 1989
- (8) (3) 21p
- (9) 大木 幸介著 『脳と心の化学』 第1章 1・1 (1～9p) 裳華房 1993
- (10) 日本「水」の会編 『事典・日本人と水』 230p 新人往来社 1994
- (11) 樋口 清之著 『水と日本人』 35p ガイア 1990
- (12) (6) 15p
- (13) 小西 正捷監修 『スカラベの見たもの』 TOTO出版 1991
- (14) 吉田 集而著 『風呂とエクスタシー』 266p 平凡社 1995
- (15) 尚学図書編 『故事・俗信 ことわざ大辞典』 小学館 1982
- (16) 佐々木喜善著 『聴耳草紙』 254p 「149番 生命の洗滌」 筑摩書房 1964
- (17) 吉沢 久子著 『私の冠婚葬祭ノート』 143p 東京書籍 1980
- (18) 三池 孝尚著 『日々新たに こころの洗たく』 日本文芸社 1993
- (19) 大山のぶ代+グループH₂O著 『水なんだ! ?』 11p、255p ㈱グラフ社 1984
- (20) 高田 明和著 『心とからだのふしぎ』 35p 角川書店 1990
- (21) 大林 智詳著 『争議のこころと作法』 39p 小学館 1994
- (22) (21) 39p
- (23) 桜井徳太郎編 『民間信仰辞典』 168p 東京堂出版 1980
- (24) 大間知篤三・他編 『民俗の事典』 53p 岩崎美術社 1972
- (25) (4) 183p

(平成10年11月18日受理)